

教師の言葉の選択

2025・1・28 重枝 一郎

コロナ禍から各学校の体育祭の取組が変わった。コロナ禍前から、PM2.5 や暑さの影響での変化はあった。練習時間も短縮され、例年通りというやり方ではなくなった。私たち教師が考える例年の流れとは違ってくると、「今年は、うまくいかないかもしれません」とネガティブな発言をする教師もいた。ところが、やってみたら多くの学校から、「生徒は集中力と自発性が増し、より一層一丸となって取り組んでいました」という声を聞いた。

私は、この成功要因は、教師の状況の捉え方で変わるものだと思っている。

上記の例で話すと、

「練習時間が十分確保できないから仕方ないよな」と捉えれば、全体はその方向で動いていく。

「練習時間が十分に取れないなら、生徒の集中力を高めることで、成果を実感できるような工夫をしよう」と捉えれば、そのように動く。ちなみに、部活動の指導も同様であり、時間をかけることがすべてではない。

この違いは何か？

それは、物事をどう捉えたかの結果として、アウトプットに使う言葉が選択されているからである。上記の例で言うと、

「暑い日が続いているから、なかなか練習時間がはかどらないよね。だからあんまり上手にはできないかもね」という言葉が無意識的にポロリと出る。

「暑い日が続いているから、なかなか練習時間が取れていないけど、そこは集中力でカバーだな。君たちならやれる。納得のいく最高の体育祭にしよう」という言葉を意識的に出すことが大切になる。

つまり、**教師自身がどう捉え、その結果としてどういう言葉を選択するかで違いは生まれる。**

例えば、学校改革をしよう。A先生は、「校長に命じられたからしなくてはならない」、一方、B先生は、「これからの生徒のために改革をやっていく」という受け取り方がある。A先生とB先生の違いは、まず動機にある。A先生は、「依存」と「他責」の生き方になる。それでも仲間はできる。自分の安全・安心も手に入れることができる。B先生は、「自由」と「自己責任」の自律の生き方になる。リスクはあるが、物事や状況を変えていくパワーに満ち、真の仲間とともに他者に貢献し幸福感を手に入れることができる。いつも言うが、幸福感を左右するのは、選択の場面で自分で決めたかどうかということになるからである。

私たちの心の中には、実は、A先生とB先生の両方が住んでいる。A先生の生き方、B先生の生き方のどちらが 良い／悪い、正しい／間違っている、ではない。矛盾した言い方になるが、「リーダーがリードするが、メンバーが自ら動いているという働きをする」ということである。生徒に対しても、コーチングを通して、できるだけB先生の生き方を引き出していくことが大切だと思っている。これも、「実は担任がリードしているが、生徒主体にする」という矛盾した働きになる。これが、入学式等で私が話す、「守られている間に、守る力をつける」ということである。学校は、失敗のできる場所だから。

J3のみなさん、研修旅行行ってらっしゃい！
「君たちなら、有意義な研修旅行にすることができる」